学力向上フロンティアスクール取組事例

（　都道府県　福島県　）

□　①発展的な学習や補充的な学習など個に応じた指導のための教材の開発

☑　②個に応じた指導のための指導方法・指導体制の工夫改善

□　③児童生徒の学力の評価を生かした指導の改善

Ⅰ．学校名及び規模

常葉町立常葉中学校							
	１年	２年	３年	特殊学級	計	教員数	
学級数	４	３	３	１	１１	２０	
生徒数	９７	８１	９１	３	２７２		

Ⅱ．実践研究の概要(主題(テーマ)及び設定の趣旨)

・主題(テーマ)

生徒一人一人に「確かな学力」を身に付けさせるための指導方法・指導体制の工夫

～生徒の理解や習熟の程度に応じたきめ細かな指導を通して～

・テーマ設定の趣旨

生徒の数学に対する思いの中に、得意、不得意という意識がある。そしてその差が大きいということが数学科の特徴の１つにもなっている。これは、勿論、生徒一人一人の考え方の違いもあるが、同じ教材を媒体として関わり合う生徒と指導者との間に、少なからず意識の違いがあるとも考えられる。この意識のずれをなくすことこそが、数学が不得意だと感じる生徒をなくす方法であり、学力向上への早道であると考えられる。

そこで、生徒の理解や習熟の程度に応じた指導方法や指導体制を工夫し取り組むことで、生徒一人一人に達成感と目的意識を持たせることができ、意欲的に学習に取り組み学力の向上が図れるだろうと考え、本テーマを設定し、研究をすすめることにした。

Ⅲ．実践研究の内容について

(ⅰ)研究体制の工夫

３年選択数学において、３コースを指導者６名で行うのに、数学科教師３名(内１名教頭)と教科外教師３名(３学年担当教師)という体制で行った。

(ⅱ)実践研究の内容

①発展的な学習や補充的な学習など個に応じた指導のための教材開発

○　単元で身に付けるべき基礎的・基本的内容を明確化にし、その内容を記したカードをヒントカードとしての作成した。授業の中では、生徒一人一人が学習課題を解決させるためのヒントとして用い、自力解決を支援した。授業外では、教室にヒントカードを掲示し、身に付けるべき学習内容として、常に生徒の目に触れるようにした。

○　１次関数の利用の教材として、時間の経過とともに三角形の形が変化する様子を視覚的に捉えることのできるプリントを使用した。事象を具体的にイメージすることが困難な生徒の自力解決の助けとなった。

②個に応じた指導のための指導方法・指導体制の工夫改善

○　３年選択数学科において９１名を習熟度別に３コースを設定して実践。発展的な指導や補充的な指導の工夫・改善を中心に行った。

◇　６月中旬　コース分け

・Ａコース(発展)コース２８名。指導者１名。

・Ｂコース(標準)コース４０名。更にＢ－１(２２名)、Ｂ－２(１８名)
指導者それぞれ１名ずつ計２名で進める。

・Ｃコース(基礎)コース２３名。指導者３名。

◇　８月下旬　１学期末の実力テストの結果を受け、コースの入れ替え

・Ａコース(発展)コース２５名。　　指導者数同上。

・Ｂコース(標準)コース３８名。更にＢ－１(２２名)、Ｂ－２(１６名)

・Ｃコース(基礎)コース２８名。

◇　１０月初旬　２学期初めの実力テストの結果をうけ、コース入れ替え

・Ａコース(発展)コース２６名。　　指導者数同上。

・Ｂコース(標準)コース３８名。更にＢ－１(２２名)、Ｂ－２(１６名)

・Ｃコース(基礎)コース２７名。

◇　１月初旬　生徒希望によるコース入れ替え

・Ａコース(発展)コース２６名。　　指導者１名。

・Ｂコース(標準)コース４６名。更にＢ－１(２５名)、Ｂ－２(２１名)　指導者３名。

・Ｃコース(基礎)コース１９名。　　指導者２名。

③児童生徒の学力の評価を生かした指導の改善

○　諸テストの結果を受け、３年選択数学のコース入れ替えを行った。

○　単元での評価規準をもとに、観点別の評価問題を作成し、単元末に評価テストを行うとともに、できなかった問題中心の補充学習を行った。

(ⅲ)成果と課題

○成果

・　指導者数を増やし、きめ細かな指導に努めたことにより、数学の学習に対する生徒の意識の変化が感じられた。特に、学習課題に取り組む姿勢が良くなった。

・　基本的な計算問題に対する計算力が向上し、下位生徒の得点力の向上が見られた。

・　普段の授業において、学習課題解決時に必要な数学的な考え方の向上が、上位生徒に見られるようになった。

○課題

・　本校の現状では、各コースとも数学科担当教師は１名ずつ（内１名は教頭）しかおらず、指導の面で問題を感じる。特に４０名を超えるＢコースでは、少人数の利点を生かそうとすれば、どうしても２クラスに分けざるを得ず、時間差での指導になってしまい、コース別の利点を生かし切れない。

・　コースごとの数学科担当教師が１名ということもあり、毎回の授業への教材開発の負担は大きく、普通授業との両立に苦しむところである。

・　選択教科での実践により、ある程度の成果を実感することができた。しかし、それは週１回という少ない回数で、しかも学校生活で基本となる学級集団を無視したものでもあり、生徒の中には特別な授業という意識があることを否定できない。そこで、週３回の普通授業の中で、選択教科での実践と同等以上の成果を期待し、研究をすすめる必要性を感じた。

(ⅳ)成果の普及方策

・ 本校ホームページに研究の概要を載せ、情報として発信する。
・ 本事業２年次中間報告を１１月に予定している。

(ⅴ)その他

特になし